

自分にリミッターをつけずに勉強すれば、 社会人の研究者と遜色なく成果を発揮できる

医学部 和泉 唯信 (いずみ ゆいしん) 研究室



和泉先生の後ろに飾られた野球選手の写真はALSのため、38歳で亡くなったメジャーリーガー、ルー・ゲーリック。

長年にわたってALS(筋萎縮性側索硬化症)の研究に取り組んできた和泉先生。和泉先生を含む徳島大学の研究チームは、ビタミンB12の大量投与がALSの進行抑制を示すことを医師主導治験で確認しました。その研究成果に基づいて2024年9月、エーザイ株式会社が「ロゼバラム®」として製造販売の承認をうけ、11月から販売開始、待望の社会実装が実現しました。

国内では3剤目、約9年ぶりとなる大学発のALS新薬は、大きなインパクトを与えました。「ALSはいまだ根治できない病気ですが、既存薬に比べたら強力なものができたという自負はあります。さらなる治療薬を創りたい」と話す和泉先生。

臨床神経科学分野(脳神経内科)では、ALSを軸に生理学や遺伝学、病理学、画像、iPS細胞などからアプローチし、ひとつの疾患を様々な方法で研究を行っているのが特長です。そうした取り組みが功を奏し、2024年10月に行われた『日本人類遺伝学会』で最優秀ポスター賞をとる学生も現れました。

学会では学生も参加しやすいよう、学生セッションを設けることが多いですが、3年生の橘のかさんは、なんと一般部門で受賞!「今まで多くの患者さんがこの研究に協力してくれたり、大量のデータを集めるため、先生方も協力してくださって、そのことが評価に繋がったと思う。多くの人に興味を持ってもらい、印象に残るような発表を行うため、ビジュアル・アブストラクト(研究内容を要約し、イラストや図などで示した画像)も工夫しました」と話します。

橘さんがテーマにしたのはジストニアに関わる遺伝子について。ジストニアは難病で、ALS同様、まだ根本的な治療法のない病気です。「歌手なのに歌が歌えなくなったり、急に指が動かなくなって、ピアノが弾けなくなるピアニストなど、仕事で一番大事なところ、よく使うところが使えなくなったりする病気です。頑張ってきた人たちが病気に苦しんでいることにすごく心が痛んで、ジストニアという病気の根治を目指したいと思い、日本で一番ジストニアの患者が集まる徳島大学で研究をしています」。

医学生の方々は根治できない難病への興味は薄い傾向にありますが、和泉先生は「自分にリミッターをつけずに勉強すれば、社会人の研究者と遜色なく成果を発揮できるチャンスもある。よりよい研究をして、優れた治療法を見いだしてもらいたい」と学生たちへの希望を語りました。



『日本人類遺伝学会』で最優秀ポスター賞をとった医学部医学科3年の橘のかさん。「まさか受賞できるとは思ってなかった」と、嬉しさよりも驚きが大きかったそうです。